

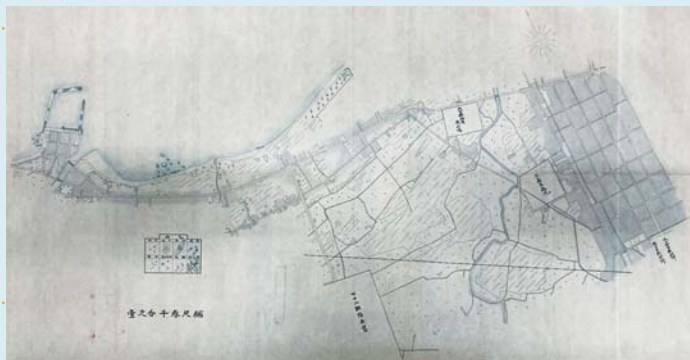
年号	年	西暦	月	事 項
明治	4	1871	(7)	市内に府内・臼杵・岡・日田・熊本県が成立
			(11)	大分県が成立
	5	1872	(1)	初代大分県令森下景端が赴任、9月に府内城に移る
	8	1875	3	町村統廃合、大分町などが成立
	13	1880	11	港会所設立、大分港の築港はじまる（明治17年完成）
	17	1884		この年、大阪商船が大分港に就航を始める
	20	1887	2	三芳村に製糸工場建設（株式会社大分製糸所操業）
	29	1896	8	別府町に豊州電気鉄道株式会社が設立される
	33	1900	5	豊州電気鉄道株式会社開業 大分・別府間に電車が開通
	35	1902	4	堀川・竹町間の電車営業開始
大正	40	1907	4	大分町が西大分町・荏隈村・豊府村を合併 竹中村が河原内村を合併 穂田村が西穂田村を合併
			6	東大在村と西大在村が合併、大在村となる。
			7	佐賀村と市村が合併、佐賀市村となる
	44	1911	4	大分町が市制施行、「大分市」が成立
			11	豊州線立石・大分間が開通 西大分駅・大分駅が開業
昭和	2	1913	3	二十三銀行新社屋（赤レンガ館）が竣工する
			10	大分紡績株式会社が一部操業を始める
	3	1914	4	佐伯線大分・幸崎間が開通、高城・鶴崎・坂ノ市駅が開業
			5	大分軽便線大分・中判田間が開通、滝尾・中判田駅が開業
	4	1915	10	大湯線大分・小野屋間開通、南大分・賀来駅が開業
				大分港の築港が完成する
	6	1917	4	大和組豊後製糸所が創業する
				片倉組大分製糸所が操業を始める
	9	1920	1	佐賀市村が町制施行、坂ノ市町となる
			9	大分駅前から新川までの電車通り延長工事が完成する
	10	1921	1	戸次村が町制施行、戸次町となる
	11	1922	2	大分紡績株式会社が富士瓦斯紡績株式会社の大分工場となる
			3	別大電車の新川・かんたん間の営業はじまる
	12	1923	4	日豊本線が全通する
	2	1927	10	大分銀行と二十三銀行が合併し、大分合同銀行となる
	3	1928	12	豊肥本線が全通する
	9	1934	10	一丸デパートが開業する
			11	久大本線が全通する
	11	1936	4	トキハデパートが開業する
	14	1939	12	日本染料製造鶴崎工場（現住友化学大分製造所）が操業開始
	17	1942	3	大分港改修工事が竣工する
	20	1945	7	大分市大空襲により中心街をほぼ焼失する
	21	1946	5	大分市戦災復興五か年計画が策定される
	22	1947	4	初の公選大分市長（第十二代）に上田保が当選
	23	1948	10	大分市が復興祭を催す
	28	1953	3	高崎山自然動物園を開園する
			6	旭化成坂ノ市工場が操業を始める
	29	1954	3	鶴崎町・明治村・松岡村・川添村・高田村が合併し、鶴崎市が成立
				戸次町・判田村・竹中村・吉野村が合併し大南町が成立
	30	1955	2	穂田村・東穂田村・賀来村が合併し、大分村が成立
	31	1956	3	鶴崎市庁舎が竣工する
	32	1957	3	大分空港が開港する
			8	大分鶴崎臨海工業地帯の造成計画が本決まりとなる
			11	兵庫パルプ鶴崎工場が操業を始める
33	1958	4		大分駅の新駅舎が完成する
34	1959	10		大分鶴崎臨海工業地帯一号地の建設起工式が行われる
36	1961	2		富士製鐵の工場誘致が決まる
37	1962	11		大分鶴崎臨海工業地帯一号地で九州石油大分製油所の起工式開催
38	1963	3		大分市・鶴崎市・大南町・大分町・大在村・坂ノ市町が合併し、「大分市」が発足
39	1964	1		大分地区が新産業都市に指定される
		10		戦災復興土地区画整理事業が完了

（ ）は旧暦

視点5 おおいたの発展

明治4（1871）年11月に大分県が設置され、翌年、初代県令・森下景端が赴任しました。当初は仮県庁が置かれていましたが、同年9月に府内城へ移転しました。明治8（1875）年には、府内城と旧城下町を中心とした「大分町」が誕生し、県都としての歩みが始まりました。

大分港の整備や鉄道の開通など、交通・流通のインフラ構築が進むとともに、町域も段階的に拡大し、明治44（1911）年4月に市制が施行され「大分市」が誕生しました。明治時代以降、銀行などの金融機関設立による経済基盤の整備に加え、築港や鉄道網の発達によって、近代的な産業や生産方式への転換が大きく促進されました。昭和に入り、戦後の復興計画の下、新たなまちづくりが行われ、昭和38（1963）年の大合併を実現、翌39（1964）年の新産業都市指定を契機に、臨海工業地帯への大規模な企業進出が進み、大分市は重化学工業都市へと劇的な変貌を遂げ、近代から現代へと飛躍的な発展を成し遂げました。



大分築港計画平面図



昭和9年 大分市鳥瞰図（表紙）

大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース

vol.

136

2026.10.17



文化財保存活用
地域計画作成
連携企画

歴史の記憶

文化財保存活用地域計画とは

大分市は、指定の有無や有形・無形の別を問わず、地域の文化財を保存・活用し、地域の誇りとして次の世代へ引き継ぐための「文化財保存活用地域計画」の作成に取り組んでいます。この計画は、文化財の保存・活用に関する基本方針と具体的な取組を定め、歴史と文化を生かしたまちづくりの羅針盤となるものです。

「昭和25年 大分鳥瞰図」

発行 大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL:097-549-0880 FAX:097-549-5766

【開館時間】入館は16:30まで 【休館日】※ただし祝日の場合は開館 ※ただし土日の場合は開館 【年末年始の休館日】 【観覧料】※団体は20名以上
9:00～17:00 月曜日（第1月曜を除く）、第1火曜日 祝日の翌日 12/28 - 1/4 一般310円（団体240円）高校生等150円（団体120円）中学生以下無料

※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方と、その介護者1名は無料。◎入館時に受付で手帳を提示してください。
※都合により予定を変更する場合がございます。

発行日：令和8年10月17日

会期

令和8年10月17日（土）～12月13日（日）

大分市
歴史資料館

おおいたらしさー歴史の記憶ー

「らしさ」は、土地・気候・地形といった自然条件と、そこに暮らす人々の営みから生まれる文化、そして積み重ねられてきた歴史が、相互に作用しながらかたち作ってきたものです。それは決して一つではなく、視点や関わる人によっていくつもの側面や特性を持ち、時代とともに変化し、育まれるものではないでしょうか。

大分市は、瀬戸内海や豊後水道に面する海上交通と、内陸部へ延びる陸上交通が交差する地理的特性のもと、先史時代の人や物の移動に始まり、古代の政治拠点の成立、中世「府内」の繁栄、近世の城下町の形成、そして近代以降の港湾・県都としての発展を歩んできました。

多様性を受け入れながら地域交流の要衝として歩み、発展してきた歴史と文化は、「おおいたらしさ」の原点です。本展では、先人たちが紡いできたその「おおいたらしさ」が、現代の私たちにどのように息づいているのかをご紹介します。

視点1 おおいたの源

大分市は、高崎山や^{りょうぜん}霊山などの山地や森林が市域の半分を占め、その間には大分川と大野川が生み出した大分平野が広がっています。市域の三方を囲む山々や、森林が雨水を蓄え、豊かな水量を誇る両河川が絶えず水を供給することで、水環境に恵まれて人々の暮らしや産業を支えてきました。

地質面では別府－島原地溝帯の北東端に位置し、多様な地層が広がっています。佐賀関や坂ノ市地域には市内で最も古い地質である「^{さん ば かわ}三波川変成岩類」が広がっており、石器や石棺の材料となる石の産地となっていました。

また、阿蘇などの活発な火山活動によってもたらされた火砕流堆積物は、^{たいなん}大南地域や大分中央地域の一部に広がっています。これらは熱や長年にわたる圧力によって「溶結

凝灰岩」と変化し、「吉野石」「永興石」などと呼ばれてきました。頑丈で加工しやすいことから、石幢や石橋、磨崖仏など、さまざまな石造物の石材として利用されています。



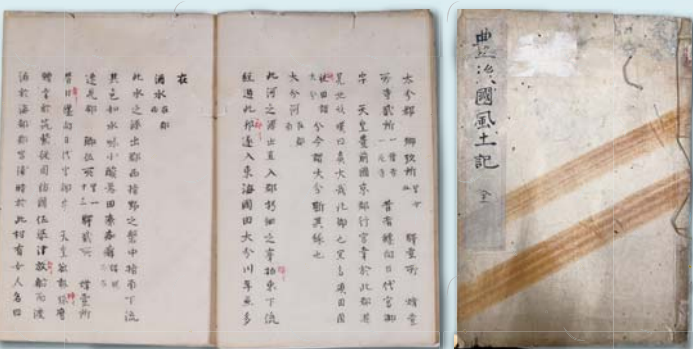
昭和61年頃 大分川より高崎山を望む

視点2 おおいたの成り立ち

「大分」の初見は、『日本書紀』や『^{ふんごのくに ふ ど き}豊後国風土記』に記された景行天皇の九州巡幸説話にあります。天皇が当地の景観を称えて「^{おほきた}碩田」と命名したとされていますが、実際の大分市域は、谷・川・山などが入り混じる複雑な地形をしています。

昭和 30（1955）年の『大分市史』上巻では、この地域はもともと「オホキタ」と呼ばれ、「大分」の文字が当てられていたことが述べられています。「キタ」は「段」を意味し、「きれめ・きざみ」を、「分」は「わかち・わかれ」を意味することから、「オホキタ」とは、大きく刻み分けられた土地を表すことが由来とされています。また、「碩田」という表記は、九州を大和朝廷の支配下に置いたとされる景行天皇の伝説に結び付けられたものと考えられます。

その後、歴史的な転換点となったのは、奈良時代の豊後国府の設置でした。律令体制のもとに、大分郡に国府が置かれ、当地域は東九州における政治・文化の中核機能を集約した地方拠点として役割を果たすようになりました。



「豊後国風土記」

視点3 おおいたの往来

江戸時代の大分市域は、府内藩、臼杵藩、岡藩、熊本藩、延岡藩、幕府直轄地など、支配領域が複雑な「諸領入り交じりの地」でした。一つの村を複数の領主が分割して支配する「^{あいきゆう}相給」の村も存在し、地域ごとに異なる支配のもとで様々な歴史と文化が積み重ねられました。

そしてこうした背景のもと、独自の地域性が形成されました。例えば、熊本藩の参勤交代や交易の拠点となる港町として栄えた鶴崎には、統治や経済の拠点として御茶屋が置かれました。一方、現在の府内城周辺には、府内藩の城下町が整備され、城下と豊前道を結ぶ「^{せんごくぼし}仙石橋」や、大友初代能直の頃を由来とし、今も信仰される「^{えび す}蛭子」など、地域に根差した歴史的遺産が受け継がれています。

このように大分市域は、各藩にとって重要な交通・交易の要衝であったと同時に、それぞれの地域で育まれてきた日々の営みや信仰が残っています。



鶴崎前川筋水理御普請絵図 大分県立先哲史料館所蔵

視点4 おおいたの名所

大分市の北西部にそそり立つ高崎山と、東の海へ突き出す佐賀関半島は、地殻変動や^{かいしよく}海蝕作用によって生まれた、急峻な山塊と変化に富んだ海岸線という地形的特徴をもっています。

豊後水道の^{はやすいのせと}速吸瀬戸に面する沿岸部は、海上交通の要衝であり、『日本書紀』などの文献や神話に登場する歴史の舞台でした。佐賀関半島の先端にある「黒ヶ浜」は、蛇紋岩の黒い石と白波のコントラストが美しく、古くから景勝地として知られています。



「豊後佐賀之関の真景」

一方の高崎山は、数十万年前の火山活動で生まれた溶岩ドームで、別府湾に迫る険しい山容は紀行文などに詠まれてきました。また、その険しい地形は旅人にとって交通の難所でもありました。

このように、東西の沿岸部で見られる独特な景観は、文献や地誌に記され、伝説と結びつくことで、それぞれの地域の歴史的・文化的背景を形づくってきました。そして現在も、大分を代表する名所として人々に親しまれています。



「杵築府内間山水図」 四極山 ^{しはつやま}